

李光平 写真・文
金富子・中野敏男・橋本雄一・飯倉江里衣責任編集
『満洲』に渡った朝鮮人たち——写真でたどる記憶と痕跡』
世織書房 二〇一九年

中国東北部（満洲）に暮らす朝鮮族の人びと。朝鮮半島からの移民は清朝時代に始まるが、その多くは日本の植民地統治期の移住者である。植民地で生活基盤を失い、貧窮と生活難のなかで故郷を離れ、移り住んできたのである。とりわけ、一九三〇年代から四〇年代の戦時下には、国策として推進された満洲移民事業によつて移住した人びとは、抗日ゲリラと日本の治安部隊が対峙するなか、集団部落を建設し、苦難の生活を営んできた。さらに、国共内戦や朝鮮戦争、文化大革命期の迫害など、激動の現代史のなかで苦難の日々がつづく。

本書は、移民一世以来の朝鮮族の人びとの経験と記憶を、ドキュメンタリー写真家の李光平氏が十数年にわたつて丹念に聴き取り、撮影した写真と証言の記録集である。

本書の出版は、東京外国語大学における科研費共同研究「日本／朝鮮・中国東北からみた『満洲』の記憶と痕跡——輻輳する民族・階級・ジェンダー」（代表：金富子）にもとづいて企画された。李光平氏の写真とキャプション・文章を中心に、朝鮮人「満洲」移民研究の専門家である孫春日氏や、科研メンバーである金富子氏、中野敏男氏、橋本雄一氏、飯倉江里衣氏、朴紅蓮氏の論考とコラムが収録された、オリジナル編集の日本語書籍である。歴史社会学、移民・ディアスポラ、ジェンダー、文学、軍事史など、さまざまな視角が交差し、複眼的・立体的な

論点によつて重層的に構成された書物となっている。李光平氏の写真のキャプション・解説文の下訳をおこなった吉良佳奈江氏、韓昇熹氏、編集者の岡本有佳氏をふくめ、多くの人びとが関わる共同作業が結実した出版である。

ドキュメンタリー写真家の李光平氏は、自身が朝鮮人の移民三世であり、祖父の李相俊氏は、一九三九年に朝鮮北部の咸鏡北道鏡城郡から中国東北・間島の龍井へ、一家をつれて移住してきた。祖父は農業を営んでいたが、故郷の地に日本軍が倉庫を設置したため、追われるように移住したという。そのとき、まだ若かった父・李鳳允氏（一九二〇年生まれ）、母・全蓮玉氏とともに移住している。本書のプロローグには、この移住から始まる家族の写真も収められている。

陰暦一九四四年（陽暦一九四五年）に三男として生まれた李光平氏は、龍井市の文化館館長となり、朝鮮族の歴史と文化を調査するなかで、集団移民の歴史を知り興味を深めた。そして、集団移民の歴史と記憶を残すべくフィールドワークを始め、延辺朝鮮族自治州（間島）の各地を訪れて、一世や二世の老人たちから聴き取りをおこなった。オートバイに乗つて三万五千キロを走り、交通事故で重傷を負った後もタクシーや乗用車で二万キロを走つて、十年余りの間に六百名を越える人々にインタビューをおこない、写真・ビデオの撮影を続けた。本書に収められた写真とキャプション・解説文は、朝鮮族の歴史をたどるロードムービーのようである。

ここには、生活用具や農機具、田畑や樹木、建物などの風景とともに、人びとの表情を写し撮つた写真が連なり、苦難の歴

史をふりかえった証言が記されている。それは、自身が朝鮮族(移民三世)である李光平氏が、一世・二世の彼ら・彼女たちと対話し、寝食をともしながら信頼関係を築いて、ねばり強くインタビューを重ねた探求の記録なのである。

移民した人びとは、故郷の地を離れ、豆満江を渡って移住し、荒地を開墾して田畑をつくり、生活基盤を築いていった。灌漑用水を引けば、水利権をめぐる中国人(漢族)との争いも起きる。そして、日本の治安部隊と抗日ゲリラ(東北抗日聯軍)が対峙する前線で、土塁を築いて集団部落を建設した。村人たちは、軍事訓練を受けて日本の治安部隊への協力を強いられる一方で、朝鮮人兵士が多かった東北抗日聯軍とひそかに接触し、食糧を提供したり荷物を運んだりもした。

本書では、日本・満洲国の軍隊・警察による拷問・虐殺の記憶も語られる。負傷した抗日聯軍兵士を、日本の守備隊が拷問したすえに生き埋めにしたとき、埋められた土の中からこぶしがゆつと突き出した鮮烈な光景が目撃され、証言されている。

また、抗日聯軍の部隊は、警察分駐所を襲撃し、日本の協力者となった朝鮮人を処断しながら、村人からはなるべく略奪せず、食糧の分配などもおこなっていたこと、アコーディオンやギターを弾き、ダンスを踊ったり、歌を歌ったりしていた様子なども語られている。

そして、苦難のなかで家族の生活と命を守ってきた一世、二世の男性たち、女性たちの生活の様子が語られる。日本軍「慰安婦」となって被害を受け、光復後も苦難の生活を送った女性の写真・証言も記録されている。

中国東北は、日本人、朝鮮人、中国人(漢族)のさまざまな思惑が交差し、矛盾・葛藤を深く刻んだ場であった。しかし、これまで満洲移民の記憶は、引き揚げの苦難をふくめた日本人の「国民的記憶」として枠づけられてきた。他方で、中国の少数民族として位置づけられる朝鮮族の公式の歴史には、集団移民の記憶は現れない。在日朝鮮人、在米コリアン、旧ソ連の高麗族などディアスポラした人びとのなかでも、中国朝鮮族の移民史はほとんど語られてこなかった。本書は、このような忘却と空白の殻を破って、移民した人びとの経験と記憶に肉薄し、朝鮮族の集団移民の歴史をめぐりに甦らせた画期的な本である。

(米谷匡史)

